O6-4 当院における局所麻酔下胸腔鏡検査の検討
高野 智子1 常見 安史1 加藤 冠2
1 大田病院呼吸器内科 2 東京医科歯科大学

【背景】局所麻酔下胸腔鏡は比較的低侵襲で急性膣胸の発作を
清浄に結核性胸膜炎の確定診斷に有用性が高いとされている。
【目的】当院での局所麻酔下胸腔鏡の有用性、安全性を検討する。
【対象・方法】2010年1月から2013年11月までに局所麻
醉下胸腔鏡検査102症例についてカルテ記載を基に後方視的に
検討した。
【結果】男性27例、女性24例 平均74.5歳（41年
86歳）胸部13例（気胸合併5例）起炎菌判明症例9例
内2症例が培養された症例は3例、主な内科的合併症は胃瘻歯後
5例、糖尿病4例、COPD/喘気性4例、心房細動3例、肝硬変
2例、脳塞栓症2例であった。胸腔を一時的に高圧化する砂円板
フィルターを装着し、生理食塩水で清浄した。フィブリノ
の析出量や出血の程度によりエウロキサーゼを散布した。エア
リーチが持続する気胸合併例1例でポリプロピレーン飢吸収性組
織包帯とフィルターを用いた。良性結節胸水11例、結
性胸水胸膜炎で医師、CT所見、検診、施行、合併症
の有無、その後の経過等から診断した。急性結核性胸膜炎4例、生
検した胸膜組織の病理組織学的に結核陽性となった症例は2例、胸水
と胸膜組織を陽性と認めたものの1例、この2例が結核菌検査
ならなかった。結核病変胸水2例、非結核性胸水2例であった。

O6-5 悪性胸腔内皮腫に見られる全身麻酔にて行なった胸腔
鏡下縫合手術6例の症例の検討
佐藤 徹1 田口 朋1 田中 広宣1 売池 妙子1
輝1 日本女子医科大学血液内科

【背景】悪性胸腔内皮腫（Malignant pleural mesothelioma；MPS）
の診療において、胸水細胞診の有用性は限定的とされ、胸腔鏡下胸
腔鏡診断の有用性を報告されている。当院では、原因不明の胸水や
胸膜の悪性変性変が認められる場合に、積極的に全身麻酔下の胸
腔鏡下縫合手術を行うが、【対象・方法】2006年1月から2013年
4月の間にMPS疑いにて胸水検査を施行した61例を対象とし
た。生検は全身麻酔下の胸腔鏡にて、壁側胸膜を補助鎖骨全層に
採用している。これらの症例の臨床及び病理学的診断を後
方視的に検討した。
【結果】性別は男性56例、女性5例、平均年齢67歳
（47歳－84歳）、病期はT3N0M0例10例、T1N2M0例21例、T4N1M0例、胸膜
ブロックが50例、なし例11例であった。胸水検査で
の検査数は平均14.2（4～24）で、1例を除く全例で確定診断が
されており、MPS32例、他の転移巣を認めたものは6
例、标签性胸膜炎1例、その他合併症21例、12例が
と診断がついた症例のうち、術前に胸水細胞診にて行った症例が3
例あり、class III以上は8例、その中で悪性胸腔内皮腫と診断、または疑われた
ものを、この3例のみあった。
【まとめ】全身麻酔下胸腔鏡下縫合手術
の診断率は高く、原因不明の胸水検診例が胸膜の悪性変性変が認
われる症例に対して、積極的に行うべき検診だと考えられる。

O6-6 腫膜膿瘍で発見された悪性リンパ腫の1例
講師 俊彦1 川瀬 克信1 岩崎 昭憲1
1 金沢市立病院胸部疾患センター
2 福島大学呼吸器・免疫内科

胸膜発生の悪性リンパ腫の多くは慢性膣胸に由来し、慢性膣
胸の既往のない胸膜発生悪性リンパ腫は稀である。今回我々
は右胸膜膿瘍で発見され、生検の結果悪性リンパ腫と診断さ
れた症例を経験したので報告する。症例は58歳男性、胸痛・
咳痰を主訴に当院受診。CTで右胸膜の多発結節を認め、織細
リンパ腫の診断が作られた。検診として30～40年後に発現
腫瘍の体形成が確認され、悪性胸膜腫瘍も疑われが検査
的入院となった。胸膜膿瘍に右胸膜内を探査すると、側腹部
と右腹部を膿胸、横隔膜に多発結節を認めた。また、手術の激
性胸水も認めめた。壁側胸膜の結節を2箇所採取した。病理組織
検査の結果、びまん性大細胞型B細胞リンパ腫の診断で
あった。術後にPET-CT撮影、織細包外リンパ腫・消化
管・骨・多臓器にFDG・高能撮影を認めた。AnnArbor分類
IV期を診断、R-CHOP療法を現在施行中である。悪性リンパ
腫は明らかにリンパ腫腫瘍を伴わずで他の部位の病変として発
見されることも少なくないため、本症例の経験から、胸膜圧瘻
の診断診断を悪性リンパ腫を疑う必要があると考えられ
る。

O6-7 腫胸治療における局所麻酔下胸腔鏡の意義
塩田 智広 氏 香・杉山 陽多・寺下 聡
国立広島病院呼吸器内科

【目的】局所麻酔下胸腔鏡は一般には胸水留置症例の診断に用
われることが多く重篤で難治性の圧瘻治療には外科的胸
腔鏡による圧瘻軸術が一般的に行われている。今回圧瘻治療
における局所麻酔下胸腔鏡の意義について検討した。
【対象】当院において圧瘻治療に局所麻酔下胸腔鏡を施行した6症
例。男性3例、女性3例。平均年齢44～88歳（平均
71歳）、2例が慢性圧瘻を伴っていた。
【方法】局所麻酔下に胸腔
縫を挿入し可動的に圧瘻を郭清・洗浄、郭清・除去を行った。
【結果】20～60分（平均37分）。
【症例】肺障害の症例で
胸水性質はPH6.18～7.79（平均7.12）、糖1～194mg/dl（平均
852）、LD169～411IU/L（平均216）、好中球分化31%～100%
（平均91）、6例とも術後速やかに解熱し全身状態の改善が得られ
た。有緻性圧瘻の2例は肉眼的に圧瘻範囲を確認する
可能性が可能で同部位の洗浄、アプロピッドを施行した後数
日で郭清は閉鎖した。胸腔ドレーンは術後4～21日目
（平均11日）で抜去可能となった。本術式による重篤な合併症はみ
られなかった。
【結論】1）術前トロッカーやから施行し軟性
縫合を用いる局所麻酔下胸腔鏡による圧瘻治療には手技に制
約がある。全身麻酔下で施行する外科的圧瘻鏡において
十分な郭清はできないがそれでも臨床的には大きな意義があ
ると思われた。重篤で難治性の圧瘻患者では局所麻酔下胸腔
鏡によるアプローチが治療方法の選択肢の1つとして得られる。